

文禄5年豊後地震関係史料の再検討

榎原雅治*(東京大学史料編纂所)・村田泰輔(奈良文化財研究所)

§1. はじめに

文禄5年(1596)閏7月に発生し、別府湾岸に津波被害をもたらした豊後地震の発生日については、古くより9日説、12日説がある。近年は地震2回説が有力となっているが、2回説の中でも津波については9日説と12日説が依然として存在している。本報告では両説の根拠史料の性格や史料相互の関係を再検討し、私見を示したい。

§2. 津波発生日を記した諸史料

津波発生日を9日とする説の根拠となるのは「豊後由原宮年代略記」(以下「年代略記」)、「豊後鶴川興導寺大般若経奥書」,「柴山勘兵衛記」,「附東槎録」である。これらの史料は、地震発生から近い時期に成立している点、豊後の事件のみを記し、京都など他所での地震に関する記述がない点で共通性をもつ。また相互に親子関係にはなく、情報源はそれぞれ別個であると考えられる。この点は重要である。

一方、12日説の根拠とされてきた豊後国内の史料は、①府内(大分)で成立した史料、②岡藩領で成立した史料、③杵築藩領で成立した史料に大別される。①に属する史料は、表現の類似から、いずれも「豊府聞書」(以下「聞書」)を祖本とすることは確実である。「聞書」は府内の商人戸倉貞則が、元禄11年に府内藩領内の寺社の由緒記や僧伝を調査して編纂したものであると考えられるが、その中に由原宮(杵原八幡宮)に関する記述が4ヶ所ある。そこには同宮に現存する史料に関する記述や「年代略記」と共通する記述も認められる。「年代略記」が「聞書」の情報源の一つであったことは確実である。

そこで改めて両者の地震記述を比較すると、両者には類似した個性的な表現が認められる一方で、「聞書」は津波の発生日を12日とし、「天下巨地震」に言及する点で「年代略記」と異なる。二つの史料の共通点と相違点に注目すれば、戸倉貞則が「年代略記」に接し、その表現を借用する一方で、すでに広く知られていた12日の畿内大地震に関する知識に引きつけて「年代略記」の記事を理解し、日付を書き改めたものと考えられよう(9日との説も注記している)。

②に属する史料はいずれも「柴山勘兵衛記」を祖本とするが、「柴山勘兵衛記」では津波の発生は9日となっている。さらに「柴山勘兵衛記」が他所の地震に言及しないのに対し、②に属する史料には「日本大地震」に言及するものがある。戸倉同様、「柴山勘兵衛記」を引用する際に、津波を12日の畿内地震の知識で理解し、日付を改めたものであろう。

③の「勝山歴代豊城世譜」は津波を7月12日としているが、同書が序文において参考したことを明記している「閑居口号」には、津波はただ「七月」とのみ記され、日付は記されていない。

以上のように、各史料の情報源に遡って調査すれば、豊後国内には、12日に津波、地震があったことを記す信頼に足る史料は皆無ということになる。

§3. 豊後国外の史料に記された地震発生日

以上の状況にもかかわらず12日説が今なお支持を得ているのは、豊後国外に12日に地震や津波があったと記す史料が複数存在するためであろう。藤原惺窩の「南航日記残簡」には鹿児島では9日に「地震」、12日と13日に「大地震」があったとの記述があり、それぞれ伊予地震、豊後地震、伏見地震と理解されてきた。しかし13日を、畿内で発生した地震が鹿児島で「大地震」と感知されたものと解釈するのは困難だろう。12日の地震も、豊後で地震があった明証がない以上、これを豊後地震と解釈する根拠はない。

黒斎玄与の「玄与日記」は確かに12日に豊後佐賀関で地震と津波があったと記している。しかし玄与自身は12日は日向の外浦におり、佐賀関に到着したのは20日後である。鹿児島で「大地震」と感じられた12日の地震を外浦で体験した玄与が、自己の体験と眼前の惨状を重ねて理解し、12日の出来事と記した可能性がある。その可能性がある以上、「玄与日記」もまた12日説の動かしがたい証拠とはなりえない。

§4. 閏7月12日の地震は何か?

以上より、別府湾に津波被害をもたらした地震は9日に起きたと判断するが、九州各地で感知された12日の地震は何だろうか。12日の地震についてはイエズス会宣教師やヨーロッパ商人の報告書にも記されている。そこに見える被害地もあわせて、12日の揺れが報告されている地点を確認すると、長崎、島原半島、肥後中部、日向南部、鹿児島となる。西南九州に集中しているといえよう。注目されるのは長崎在住のスペイン商人アビラ・ヒロンの「日本王国記」で、それによれば「日向 Hunfama」が水浸しになったという。従来これは豊後沖ノ浜の間違いとされてきたが、志布志湾奥の「上之浜」のことではないか。日向南部から鹿児島にかけて分布する遺跡群では、発掘調査により多くの液状化痕跡が認められている。「日本王国記」の記述が志布志湾岸の液状化を描いているのだとすれば、12日の地震は九州の南部で発生した地震である可能性も考慮すべきであろう。